WASON
HQ
1104
J74+

Aug. 25
1885
no. 3

驛遞局認可

明治十八年八月二十五日發行

女學雜誌

第三號

東京萬春堂

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

五常の歌 （義）

人を惠むまごゝろの道に宿からはなほさへとむる身ともなりなん

●女學雜誌第三號目次

宮內省女官錄●婦人の地位（中）●雜報數件●和歌三首、發句二句、詩二首●梅香女史の傳附圖●源氏目錄文字ぐさり、文法は肝要、女子に諭ぐる文、てまり歌、文といふ詞の辨、浮世といへること、おかしをかしの別、閨秀和歌數首●裁縫の教、給仕の次第、歌の話、懷中鏡のこと、香のきゝやう、月琴獨稽古（二）九連環●姑の心得、遊女四季花の見立、箱入娘の事、和洋人種の異同表、各國婚姻の風習（二）洗粉の製法●石女の答、結髮の答、假名の問外三件●諸廣告

八月廿五日

明治十八年間 女學雜誌發兌日表

	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
	廿日	十日	十日	十日	十日	十日
		二十五日	二十五日	二十五日	二十五日	二十五日

廣告價正表

一行一回揭出	但廿三字詰	前金五錢
同三回以上	同	同一割引
同六回以上	同	同二割引

報告

當分毎月二回の發行と定むると雖とも事業の整頓するに隨ひ漸次回數を增加して毎週一回の發行とすべし●本誌は必ず前金を要するを以て御注文の節は代價郵稅共御送付を乞ふ●郵便切手代用は堅く御斷り申上候但し不得已者に限り一錢切手一割增にて申受候●爲替は東京麻布飯倉郵便局へ向け御振込被下其爲替券を弊堂に御送付可被下候●詩文和歌發句等の原稿御投寄の節は作者の國郡町村姓名等明細に御記入可被下候

女學雜誌代價郵稅表

一冊	正價四錢	郵稅一錢	合計 現金五錢
十冊	同卅八錢	同十錢	合計 前金四拾八錢
廿冊	同七拾錢	同廿錢	合計 前金九拾錢
卅冊	同壹圓	同卅錢	合計 前金壹圓卅錢

但し毎號拾冊以上づゝ取纏めて御購求被下候方へは賣捌所同樣特別割引可仕候

●宮内省女官錄（明治十八年七月廿五日改正）

命婦上等給　大坂　正八位　西　西子
　　　　　　滋賀　正八位　生源寺　政子
權命婦　東京　吉田愛　東京　羽倉豐子
十六等出仕　東京　松尾えげ
十七等出仕　京都　渡邊いま　東京　山口寧子
其他は第壹號女官錄の通

女學雜誌第三號（明治十八年八月廿五日）

●婦人の地位（中）

世の中追々に開け渡りて文明の度ます〱高きにつれ男女の交情亦た段々に變化し初は專ら色を尊び次には甚しく癡情行るべきが今は漸く開化の時代となり此よりはたゞ愛心を以て互ひに交はるべき順序となれり大凡そ我日本國の人々ならんもの特には後來婦人の改良を圖らんと思ふ者は必ずや彼の野蠻若くは半開の時代に行はるべき交情を願はずしてたゞ彼の開化時代に流行すべき習慣の行はれんとを希ふあるべし婦人をして至らすべき眞正の地位とは即ち此の愛心の行はれて男子と互ひに眞の愛を爲すの時なるべき歟然らば所云る愛心の行はるゝとは如何樣にすべき事なりや昔しも今も皆あそのつまを愛せしと思はん人は非じこれより流行してんと思ふ眞の愛とは如何なるものぞ此れ茲に論ろふべき要點なり

今の世の中に此の開化時代に逹りて眞の愛を行へる國ありや人は歐米の風習は即ち是れありと云ふらん又た今の世にかゝる最上の地位に至らせんとを論ろふもの世に在りや人は之を男女同權の論を唱ふる者なりと云ふらん由りては吾人かの歐米今日の風習及び男女同權論者現今の論議は眞に正しきに適へりや否やを先づあらまし説き明さん

慮みれば歐米今日の風習は婦人をして眞にかの地位へ至しめざるものに非ず反りてその地位の上に登らせざるものと云ふべし彼處に遊びし人々の實話を聞くに男子はその言ふ所ろ正しくとも婦女の反對にあさゝ世に容らるゝ能はず君子大人と云へども婦女の

機嫌をとりて其の交際を得るに非ずバ世に尊まるゝ能ハずその前にハ煙草を喫ざる能ハず其行くにハ后に隨ハざる可らず彼れ登るときハ其靴をぬがせ其降るときハ之を穿たせ室に入てハ之を上座にして食をとりてハ先づ之に與ふ而して如此ならずんバ婦女ハ大不平を唱へて男子の失敬を責ると云へり是れ豈に眞正の交情ならんや婦女を男子の奴隷とするハ男子を婦女の奴隷とすると均しく不正の事なり今西洋に行ハるゝ如き取扱ひハ恐く男子として婦女の奴隷たらしむるにハ非るべしされバ婦女の剪弱なるを憫みて之を助け之を護るの理なるべし然らず婦女たるもの謹んで男子の厚情を謝し其信切を有難く感じて反て万事扣目にすべき筈ならん然るを揚々として之を得たり良し己が夫を附物の如く蔑視して我儘なるハたとへバ子女が両親の保護に付け込みて之を輕ろしむるが如しその悪むべきと如何ぞや故に吾人ハ今日歐米に行ハるゝ所の交情ハ婦女をして反て高きに登らしめたるものにして其地位ハ眞正の點を越過したるものと評し之を採らざる也

又た男女同權論の如きハ甚だ漠然たる者にして之に由り男女の交情を改良せんとも能ハざる筈なり抑も權とハ何を云ふか先づ譯して身分と云ふが如きか然るに身分に天然と人爲との二つあり例へば男も人なれど女も人なり婢も僕も亦た共に人なれバ華族大名も亦た人なりもし人たるの天然に付きて云ハゞ何れも皆な同等なれバ即ち同様の身分あるものにして之を同權と云ふも可なり然れど天然の身分に於て同權なれバとて之が爲に世の中の交際に於ても亦た同等ならんと云ハゞ是れ主人も婢僕も混合せる無理の論ふひならん其人爲の身分に於てハ主人ハ主人たり婢僕ハ婢僕たり男ハ男、女ハ女、と各相違せる所の權なれバこそ戸主に男を立て徴兵に女を徴ず婢僕をして

主人の命に隨ハすべき譯あるならずや然れば男女を天然に同權なりと云ハゞとて若し其の世の中の人爲の身分の到底相違あるべきものと知れなバ此の論によりて婦女の地位を高くせんと思ひも寄らざる空望ありと云ふべし之を例へんに一人の男子ありて妻ハ成程一箇の人間なれバ吾れと均しく人類たるの權あるべし然れどわが父母及び君主華族も亦たわれと均しく人類にして同權なるべきに拘ハらず世の中に於てハ見るが如き相違せる取扱あるべきなれバ我の妻に對するも亦た其の如く相違あるべきこと勿論なりと云ハんに之を如何とか辨ずべき然れバ所云る男女同權論ある者の如きハ必竟婦人を改良するの効能あるものにハ非ざるなり

歐米の風習採るに足らず男女同權の論亦た効なしとならば婦人ハ如何なる地位に至らしめて其地位に於て行ふべき男女の交情ハ如何にせバ宜しかるべき此れ次に吾人の明解すべき所ならん

●喰樣の稽古　當今ハ外國人との交際上にて動もすると西洋料理のお相伴があるゆゑ仕法を知らぬも極り方が悪いと云ふ所から貴婦人方の内にて數名申し合せ西洋料理喰方の練習をする爲め毎月三回づゝ上野精養軒へ集會さるゝとハおたしなみ〳〵

●看護婦の學科　共立東京病院の中に設けられし看護婦養成所ハ二ケ年期にて卒業し二十回の試驗と施行し毎回試驗連日實地に就て米人スクリード氏が教授される其學科ハ藥物學と生理學なりと

●幼稚園　芝麻布両區の有志者が發企して設立したる芝公園内の幼稚園ハ開園以來貴顯華族方の幼兒にも追々入園され目下ハ岩倉毛利二家の令男令女を始め數十名に及びたりと又去る十二日にハ松方參議の七男(五年)八男(四年)の兩君にも入園されたる由なるが同園にてハ勉めて高尚活潑の教育を旨とし重に

運動なさしむる爲め近々備付の馬車を製し府下を廻りて体育を健全ならしむるの目的なりといふ

●女子修技學校　電信局にては技手の妻女を助手に採用して電信事務に從事せしめらるゝに付て今回修技校中へ新たに女子修技學校を設けらるゝことに決したる由なり

●卒業生の名　前号に記したる女子師範學校卒業生の名前は左の如し●脇野りい子●高崎よろ子●清水たり子●山中りう子●岡みや子●相川りり子●野村つぎ子●野村そぎ子●遠藤いと子●大江なり子●吉村けい子●畑江つな子●土屋うた子●三宅やま子●渡邊のう子

又た高等女學校の卒業生は●片柳くら子●柳田じゅん子●風間いね子●小池よし子●藤田りう子●長濱なき子

●女醫學士　米醫マカアテーと云へる人は妻に十數年間支那に在留して支那人の娘金姓なるを養女に貰ひ受け其後ち我國へ渡來し數年滯在して再び支那へ渡りしが先年歸國の砌米國に連れ歸り同所の婦人醫學專門學校に入れて醫術を研究せしめたるに金娘は多年の苦學にて此程同校を卒業し醫學博士の學位を受け取り尚ほ暫し同國に滯在して彌々その施術を研究し然る上支那に立戻りて施術を盛んにせんと昨今頻りに勉學中のよしなり（本年八月四日時事新報）

●貞婦の後榮　産たる子成人して如何なる英傑にならるやも知れぬを墮胎などする程の淺間しき者はあらじ茲にそれらの愚夫愚婦の鑑ともなるべき話は岩手縣陸中の國西和賀郡猿橋村なる藤田きく（五十年）と云ふ寡婦にてきくは今を距る三十二年前該家の戸主甚太方へ嫁せしが其の生質貞順にして舅姑を敬ひ夫に事へて他事なく一家睦まじく暮すうち長女はつ長男吉太郎とて男女二人の子を擧け猶懷妊中不幸にも夫甚太は長の病氣にて養生叶はず終に空くなりたればさらぬだに生活に差支ゆる水呑み百姓が肝腎の稼人を失ひ其困苦言計りなけれどおきくは少しも屈ず亡

夫の両親を勞はり六歳になるおはつと三歳の吉太郎を育ながら農業に怠らず一心不亂に稼ぐのを見て村内の者の云ふにれ前ハ感心なお稼ぎだが一家五人でハ中々暮される者でハない夫に今又一人殖たら彌よお困りだろうから不便でも腹の子ハ暗から暗で亡父さんの處へ遣り身を輕くした上で何所ぞへ再縁したら宜らう抔と入ぬ老婆心に世話をやく者もあれどおきくハ些ッ心を動さず此お腹の子ハ大切の忘れ紀念何で其樣な酷い事ができませうと堅く斷るゆゑ其後ハ右樣な事を云ふ者もなく又若後家と侮り袖褄などひく者さへなくあり只貞婦と譽るのみ斯ておきくハ月滿て玉の如き男子を分娩されバ留吉と名號愛きが中にも成長を樂み居しに光陰ハ矢の如く留吉も早學齢となりされば責てハ帳簿でも記らるゝやうに仕たきものなりとて同村の小學校へ入しに此留吉ハ天然の才備り試驗の度毎及第して追々進歩するので母ハ傍に喜び居たりしが夫に引換兄の吉太郎ハ所謂癡漢にて物の役に立ず夫ゆゑ留吉のみ當にして居ると天の助にか十六歳ぐらゐから農業の間にハ敎師を兼帶し彼是するうちに漸次家も富裕になり此留吉の爲めに老夫婦ハ天壽を以て死花を咲せ姉れおはつも他へ縁づけ今ハ二十一歳となりしが母おきくを大切にし身代益々旭の昇るが如く繁昌なるにぞこれ全くおきくの貞操より出たる德にしてモシ人の言葉に迷ひ墮胎なぞするならば此福ハ得られまじものをと村内何れも其後榮を羨み居るよし

●藝妓の總數　當今府下各所の藝妓とお酌の總數ハ千三百六十五人にてその内十年以上十五年未滿百〇五人十五年以上廿年未滿四百三十四人廿以上二十五未滿四百三十四人二十五以上卅年未滿百七十八人三十以上五十五未滿二百十四人にて賣淫の處分を受た者ハ僅か五十五人なりとハ割に少いハ結構

●日本婦人論　同論の後編は頃ろ時事新報社より出版になりました委細は廣告欄内に就て御承知あれ

○首夏　　磐城棚倉　内山すみ女

惜しミつる花に殘れることゝろさへ
　風なつかしき夏ハ來にけり

○船納涼　　東京　中村森子

夕風のすゞしさ見ゆる隅田川
　のぼりくだれる千舟百ぶね

○不見戀　　麻布　稲村　千町

中垣を誰が夕月のほのゝにも
　見ることかたき我おもひかな

○春山　　防州　岡　可笑

よこ／＼と笑ふさまあり春の山

○踊　　赤坂　神谷　花子

糸賣て京の紅買おどり哉

○江村夜泊　　上總　伊藤　竹風

月落烏啼白露清。漁燈數点照波明。山鐘一杵知何處彷彿楓橋夜泊情。

評　詩亦彷彿。唐賢遺響。

○過古戰場　　勢南　金子玄ゆん

沈暉閙映暮禽飛。蓬斷草枯荒逕微。想起當年連戰日壯夫鮮血染殘衣。

評　一讀令人酸鼻

○梅香女史の傳

第二　親子言なし秋のあばらや
　　　片紙言いふ夜のやぶれ戸

ノー梅や父上の御行衛ハ如何にや今に知れぬとの此便り今日しも城下の親戚より斯くハ知らせて來つるなり吾夫平常の氣質にましませバ後ろぎたなく逃げ隱れて死を一たんに緩るめ玉ハんと思ひも寄らぞ十か九ッ隆盛等と頭をならべ討死し玉ひけんとハ思へども夜なく／＼の木梢にひゞく秋の風友に離れし厂の

聲さく度々の物思ひに張りつめし氣もたゆみてと烈婦もさすが愛慕の情とゞめ難きハ人情なりけり梅ハはふり落る涙をさぞとおしかくして心雄々しく慰むる樣母樣の仰にハ候へど父上ハもと止み難き友義に迫りて隆盛の手に付き玉ひしも其后ハ事々ニ御意見の合ハざれバ自づと人にうとまれて要ある戰にハ出で玉ハざりしとか風かにきゝし事も候へバ城山籠城の折から迄で伴ひ來たまひしとハ思ハれ候ハず況して万よ一ッ世をあきらめて打死し玉ハんとも落城の日某と云へる武士ハあつばれの働き功名して枕を戰塲の露よ布けりとぞ人も云ハんに今日迄でその風評なきハせめてもの頼みに候ハぞやと理ならぬ理も母を思へる娘氣にとりつくろひて慰めけり母も漸う氣や解けゝん涙のみこみ起き直りて此ハ我ながら役なかりきそれそれにしてノー梅や我家を嗣んハ汝一人外ニ男子の血すぢもなければ女ながらに先祖より由緒正しき世つぎぞや今ハ昔に異りて勉めバ誰れも世に出る公平がちの習ハしぞと東京がへりの書生等が演說なんどに述べたりきされバ汝も一身の身を愼みて勵みあバ名を舉げ家と興さんと難しとも思ハれぞ今日の便ふてれ見よかし妾をひきとり介抱し汝ハ東都に上せんと信あまかの信切ぶや妾ハ城下に兄妹の二人ハ今もながらへて叔父ハ斯までまめやかなれバ汝ハ心を沖繩のたとひ端まで行かんともたゞ學成りてつゞれ着る今日の姿をふりすてつ錦きん日をいつしかと待ち居らなんと勇ましく今將る勵ます辞の中思ひ出づべきとやある屢ハとぎれて鼻かみけり梅ハさきにも獨りして心定めし折からなれど斯れバさすがに胸ふたがり咲くと定めし梅が枝の蕾の雪におそはれて枝重なる姿なりやゝ暫らくしてやう〱に顏ふり上て答ふやう母樣の御敎心に徹しいと有がたく覺え候へど御いたつきも倘ほ治まらぬを如何でふり

すて參られ候へん城下の親戚あのくまでの情あらんとならむ翌日より其方に移りすみ御看病をへりし后東の叔父御の御許に上り行くとも遲くは候まじされさり乍ら西ひがし遠き旅路を中まして厂や燕の往來をたゞ便りとも見ん日には母の身や子のうき學び如何で心のやすからめと思ひ過ぐすも二九からぬ娘の身ふれ無理ならじその后ち聲も數度びしはふく音にまぎれつゝ他所にはきけぞなりになり」頃しも影くらき三日月のかげふたゝぞむ一人の武士あり面貞相体

明かよハ見とめん便りなく〳〵もさきより進りに聲
のみて家内の話をきゝけるが何思ひけん懷中より僅
かの帋を取り出でゝ矢立の筆に墨ふくませ暫時うち
案じつゝさら〳〵とかきつけゝるを戶の板の破れに
挾みてあまたゝび行きつもどりつ彷徨ひしが思ひ切
りてや足ハやゝ何處ともなく去りにけり」此時いう
に書き付けゝん后に至りて自から明かとなるゆゑあ
れど今まづその辞のみこゝに掲げん

相見てののちのこゝろをくらべつゝ　忠直
きゝみを向けてしぞしかくれん

○源氏目錄文字ぐさり　若宮錄次郎

源氏のすぐれて優されそゝなく消し桐壺よよそにも
見えし帚木ハそれのら音になく空蟬ややそらふみ
ちの夕顏ハ若紫の色ごとにゐほふ末摘花の香に
錦とミえし紅葉賀かせそいとひし花の宴結びかゝ
る葵ぐさ榊の枝におく霜ハ花散里のほとゝぎ
す須磨の恨にまづみにし忍びてかよふ明石がたた
のめし跡の澪標よもぎが蓬生露ふかみ水に關屋の
影うつしまらぬ繪合おもしろや宿に絕せぬ松風も
ものうき空の薄雲よ世は槿の花の露ゆかりもとめ
し乙女子ごゝのけつゝふのむ玉葛らゝたきそるの初
音の日ひらくる花に舞ふ小蝶ふかき螢の思ひこ
そ幽なつかしき常夏や遣り水すゞし篝火の野分
の風に吹まよひ日影くもらぬ行幸にハ花もやつる
ゝ蘭の柱ハわすれしを折る梅が枝のにほふや
と解にし藤の裏葉かなあに逆摘し若菜そと森の柏
木ならの葉よ横笛の音ハおもしろや宿の鈴虫こ
ゑもうしくらき夕霧秋ふかみ御法をさとりし磯の
あま幻の世の程もなく雲隱れにし夜半の月きく名
も香ふ兵部卿うつろふ紅梅色ふかし忍ぶふしなる
竹川や八十宇治川の橋姬ののがれて來にし椎が本
共に結し總角ハ春を忘れぬ早蕨も本の色ある寄生

や宿りもとめし東屋、の法の名も浮舟、のうち契りのはてハ蜻蛉、をおのがすさびの手習、ハはかなかりける夢の浮橋、

○文法は肝要

さて近きよの文の中にハ章段もなく照應もなくたゞこと葉を長くのミ書綴ると文と心得るもの丶ごときがまゝありて彼の首尾、眼目、照應やうのものハ絶て見ることなしいかでこれを文章なりといはんたとへば人にて頭も手足も眼もあければ是を人とハいはぬが如くなるべしたゞ人と云ぬのみかハおのれハ怪物と思ふを世の人ハこの體を異に本邦文と心得古のハ漢文になづみからめきたりなどいひしそくるはいともかたはらいたきわざなりかし近世こゝの文を迂遠とし漢文を簡辨なりとてはやすもさる文をのみてこゝの文と思へるよりかゝる人の批評をうくるなるべしあはれ口をしき極りにハあらずやそもそも文章のをのしきとをかしからぬとハ文字に差別あるにハあらぬ漢といひ西洋といひ本邦といふも皆文字はもとより詞をうつすまでの符簽なれどそのかき綴る人の優劣によりて文の功拙ハあるぞかしおのれ川田甕江翁の説をきゝしことあり翁云ふ頼山陽ハ近世の文章家なりされど彼の日本外史の文を見るに源平氏の戰ひの條の如きハ平家物語などの文章には遠くおよばずさるハ物語に戰ひのさまなどいまみるごとくあるハ漢文にてハかくべうもあらぬ故なるべしとぞいはれけるまた橘守部翁もこゝの文ハ漢文にまさりてめでたきことを文章撰格のうちにも論らひたりくはしくは本書を見るべしさていづれの文章にても入破、緩急、抑揚、頓挫などいふものハなくてはならぬことなるを近世の文に見えぬハいといぶかし中古までの文にハ皆悉々くこれらハ備はりてあることなり云々（文話）

○女子に諭ぐる文　　磐城　蘆野明日香小史

我日の本の花ぞかし。我日の本の光ぞと。我日の本の人々の。世界に誇る作樂花。外國人も仰ぎ見て。愛でぬはなしと聞くぞかし。實に此花の咲くときハ。花てふ花ハ多けれど。其色其香其姿。並べて見るべき花ぞなき。五大州中第一の。花とよみけん唐うたも。理なきや宜なりけり。あゝたのもしや日の本ハ。數にハあらぬ草木にも。世界に誇る花ハ咲く。さりはあれどもつくゞゝと。思ひまわせバ日の本の。花てふ花も光てふ。光も佐久良にあらずして。さくらに勝る花にあり。さくらに万さる其花ハ。物言花と人ハ云ふ。世の少女子や。是ならん。去れどむかしハ此花を。知らざる人の多きより。其養を怠りて。培ひもせず芸らず。おのづからなる生立に。任せし故に大方は。見るべき花も咲かずして。散りにしてとの哀さよ。開けし三代ハかしこくも。物言花を移し植ゑ。敎ふる園を設けられ。

東の東西のにし。惠を至らぬ隈もなし。物言花よ物言はん。時に後れず先だちて。敎の園に身をゆだね。朝な夕なに置き増さる。惠みのつゆに沾はゞ。などかは花の咲かざらん。さて此花の咲く時は。其色其の其すがた。左久良に増して國俗を。良さに改め人がらを。高きに進め比なき。善き世を作り。類ひなき好き人造り出さんハ。皆此花に由るぞかし。かゝる時社爭ふて外國人もあふぐべく。我邦人もまたふべし。是れ日の本の花にして。又日の本の光りなり。草木の春ハ櫻花。皇國の花は物言花。盛りにかをる時に在り。左久良の花は年毎に。時をたがへず咲きぬれど。二ツの花の花くらべ。姿くらべて咲乱れ。世界に誇る其春ハ。何れの時にあるならむ。早々見まくのほしき哉。物言花よ少女子よ。此ことハりを能く悟り。三代のめぐみを能く思ひ。皇國の春の入らん日を。心にかけていのるべし。拙き文を忘きりゝ。嗚乎がましくも諭ぐるになん

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

○てまり歌　　阿波徳島　林　さだ女

一ッとせ　人ハ萬の靈なれバ父母のこゝろを安んせよ　かうかうかいな

二ッとせ　夫婦ハ和順が第一に互に親しみやすらかに　くふそうかいな

三ッとせ　身うち一門多けれど父母につゞきて兄弟の　あいけいかいな

四ッとせ　世にも尊き君の恩ふちうふけいのなき樣に　つくそうかいな

五ッとせ　いつも驕慢なき樣に先生の敎諭を則として　つとめうかいな

六ッとせ　ひえきな鳥や獸をば殺さず草木も愛すべし　あいれみかいな

七ッとせ　習ふて學んで卑より高きなのぼるも勉強の　ひとすぢかいな

八ッとせ　敗るも成るも堪忍の一ッに外れなきものぞ　こゝろえかいな

九ッとせ　言バひかへて行ひハ敏くするこそ人のみち　まもろふかいな

十　とせ　德ハ上見て怨やまず我身を高しと思ハずに　世をわたろかいな

○文といふとばの辨

○ふみとハ汎く文書をさしていふ雅言なりいま俗に女子の單帖の通稱の如くいふは其中の一種なる消息文といふべきを消息の二字を略して唯文とのみ云慣しがいつとなく常言となりたるなり

○浮世といへると

浮世とハ憂き世といふことにて憂きことのあるときいふ詞なるを近頃ろ世の中のおとをさして惣て浮世といふは大なる非事なり漢書に浮世といふとのあるより誤りて然いひならへるものかされバ歌と詠み古き歌を見るにも其心をべきものぞ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○おかしとをかしの別

物をほめていふおかしはおむかしといふ言葉の約にておの假名なりまた笑ふべき時にいふはをこといへる言葉の活きてをの假名なり然るを近頃その差別をしらでほむるも笑ふもをかしと書くはいと可笑

小池　道子

○

ぬば玉のよふかき霜にさへずして
　散るらんものゝおとのさやけき

伊達　富姫

○

春がすみ爲ざてこす身の怠りも
　今さらくやし君よおくれて

野田　鶴子

○

うつりゆく世の憂事もたらちねの
　いますかぎりは樂しかりけり

大野　定子

○

世よさけきやまとごゝろはことさへて
　からなでしこもたをりきるなり

松門三艸子

○

月かげをあはれといひてとるふでの
　うのけのすゑも見ゆるよはかな

○裁縫の敎

今ま裁縫と云へば裁よりして而して後ちお縫に及ばねばならぬものと心得る人々もあるめれど是は左にあらず衣服を仕立んには先づ裁切りて而して後に之を縫ふものなるより斯くは熟字せしものなり故に之を學ぶの順序よりして云へば則ち先づ縫ひよりして後に裁ちに及ばざるべからず何に因て斯くなさねばならぬかと曰ふに裁ちは難くして縫ひは易ければなり故に衣服の仕立を學ばんものは先づ縫ひ方を略ば學び而して後に裁ち方を學ぶを順序となさゞればあるべからず去れば其の縫ひ方は最初如何して之を學ばんか先づ布を二重にして之を眞直に縫ふを數日に

しバ稍や針の遣ひ方をかれバ其れより糠袋を縫ひ又一層すゝんで雜巾刺及び前掛巾着縫等も既に濟めバ愈よく襦半單物と順次に學ぶをよしとす扨て仕立屋の縫物ハ多くグシと唱ひ一動手に數針を縫ひ進む足袋屋の如きハ多く一針抜きと稱し一動手に一針を縫ふに止まり尤も足袋屋にも亦グシ縫ひあるも足袋屋のグシ縫ひハ仕立屋と異にして針短くして唯だ右の手を動かすのみにて敢て左の手を動かさゞるものなり然るに仕立屋のグシ縫ひハ針長くして左右の手を動かし特に左の手ハ布の遠くを持ち其の運動右手より更に大いなるを法とす是れその要足袋屋ハ縫目の細やかなるを貴むも仕立屋ハ上りきれいにして且つ早きをおもんずるに因るなり　（未完）

○給仕の次第

そべて女のたしなみハ髮をゆひ化粧して朝夕身を奇麗に持べしそが外を作るのみにあらず上たる人への禮義おてまた不淨を除くともいへバ人の給仕にあるときハ猶さらのことにして手足をきよらかにすべし女の顏に紅粉おしろいをよそほいたりとも手足のむさきはよげなく愛相のつきるひとつなればよく／＼嗜なむべし

膳ハすゑやうの事兩手の親指を膳のふちへかけてしつかりともち目八分にさし上げ膳の下より見る如くにしてしとやかに客座三尺ほどこなたにひざまづき膳を下に置き兩手をかけて客の前へおしてすゝむるなりとかく疊のへりをふまぬやうに心がくべしたつときハ客座敷の右座におらバきふとハ左の足よりたつべし客左座あらバ右の足よりたつと心得べし

客飯椀を出すときたつて客座の三尺やどこなたにひざまづき左の手をつき右の手に盆を持て差出し飯椀をとりて飯鉢のある所へもどり飯椀ぼんおのせたるまゝ下お置き兩手にて飯鉢のふたを取り下座の方へ

あはむけて置き飯椀の糸底を左の手にてもち右にて杓子を取り二杓子半にもるべしさて飯椀を右へ持直し糸ぞこをもちて客へ差いだすあり又た飯鉢を直に客の前へもち出して右の如くし飯をもることもあり中輩は此格にてよろし　（あとはつぎ）

○歌の話　（前号のつゞき）

義太夫は面白くして常磐津は俗に所謂身あり而して岸澤は常盤津の稍々いきなるものにしゝ清元は最もいきなるものなり而して長唄は尤も品格善くして歌澤は小いきで丸ぶきものなり而して新内はいきにて又色ものなり

さて一派の中にも其れ〴〵の流派ありて歌と三味線の別あり義太夫に於ては竹本豊竹は歌にして鶴澤は三味線なり長唄に於ては芳村、藤田、岡安、松長、坂田は歌にして杵屋は三味線なり故に歌を學ばんと欲するものは其歌の派に就かざるべからず

長唄の歌派に於て岡安は少しくいきにして松長は諸々につゝこむ所あり而して芳村、藤田、坂田の三派は孰れも皆な同じ樣なるものにして敢て甚だしき變りなきものなり

概して義太夫の歌は其の聲を腹中より出すものにして清元は聲を鼻の先にて轉がし長唄は咽にて聲をまめるあり

歌は總て餘り大きな口を開かずして唄ふなりさて長き節の所には必らず中程より聲を變らせて内へ聲を引く所あるものなり故に其の喰違の所にて息をつぐべし若し此の法を知らずして始より終りまで一聲にて歌はんとせば終に其の聲つゞかず中途にて消てなくなる若しなくならざるも煙の如く雲の如く又た幽靈の如く尾りも別らぬ樣になるべし又或は八九分の所に至つて其の聲をつぎ足すものあるは實に聞き惡くきものなり故に長き節の所は必らず其の聲を内

へ引かんとする鬢り目の所まで一寸一息つくよ肝要
あり　（そはり）

○懷中鏡のこと

今ある古鏡の小なるはむかしの懷中鏡なるべしかう
おもふよしはむかしのよし或女は今のごとくものま
うでのさきにてもかはつくる事古書に散見されば懷
中なかゞみもちつらん和泉式部集下の卷「人のおき
たりけるかゞみのそこをかへしやるとて。かげだに
もとまらざりけります鏡そこのかぎりはいふかひ
もなし」これも男のおきをすれたるかゞみをかへす
歌なりわにれしとあれば懷中鏡あるべし男もくわい
ちゆうかゞみもては女は更也又枕のさうし「きよげ
なる人のよるは風のさはぎにねさめつればひさしう
ねおきたるまゝにかゞみうちみて」これも大内の女
房宿直の時のさまなきば手近く鏡臺などあるべきや
うなし枕のもとにおきし懷中鏡にやありけんかし後
の物に見えたる中よ玉海建久二年六月の條に鼻紙の
間に鏡をいれて持事みえたりてあらを徴とすれば古
き小鏡は懷中鏡なるべし云々（女裝考）

○香のきゝやう

香のきゝやうは香爐をうけとりたるまゝにてきくべ
し手を上へあげてきくといやし香爐の灰のおしや
う菱形にれすべしいづれもおしきる所をも長くおす
べし半はいむ事なりたきものゝ時は灰をおすに銀葉
をしきそのまゝ置べし請取わたしの事左の手ヨ香爐
をすへ右の手をそへて渡すなり請取やうも同前にて
ゝろゆべし但し貴人よりたまはらば右の手を左の下
へかさねてきくべし

○月琴獨稽古

清樂譜（二）月琴の圖解は第壹号に詳載せり

九連環

上々工尺工四上尺工上四合々四仩々

合四々仕四仕四仕四合々四合四仕合
々工々尺工六五六工尺上○尺上○

○姑の心得

それ姑最初の願ひのごとくそれハ則ち姑のかゞみとなるべし何を以てかくいふぞとなれバ初めに姑のねがふ所ハ子息に嫁をとりて夫婦中よくさせ家ををさめさせなど最早やうき世におもひ殘すことハあるまじと思ふ故に嫁をむかへて婚禮も首尾よくすみぬればあらうれしやといふその舌をひき入れざる内に悴の氣に入さへすれバ理屈いふでハなけれども思ひの外支度麁相にて此方の約束違ふなどゝいひ又ハ支度十分なれバ嫁に自慢顔見ゆるなど乳母腰元に呟くより此ものども追從して仰の通りあの如くのお支度に似合ぬ姑御へのみやげもの麁末に見ゆるなどとや譏事いひ出すとも事おこるはじめなれバ是を愼しむべきことなれども女心の思慮なく次第〳〵に事かさなりて家の亂となることをしらぬ爺親にあしくいひなしそれよりて〻親を小ざてにとり親の氣にいらぬ嫁を追いだす事に誰も申ぶんは有まじきなどといひてせめきいだせバ息子氣のどくさに取成いふとき女房に目のくれるも其方の愚昧ゆゑなどゝ我子へも耻をあたへ嫁のにくさにわが子へもあたりあしくなり最初嫁をとりて家ををさめさせその身ハ安樂の身とならんと願ひしこともきえて〻修羅をもやす種とハなりぬ淺間しきことならずやこゝをもつて姑はじめの願ひの如くせバ世上の姑の鏡となるべきなり歌に　いにしへの嫁のつらさをおもひなど鬼ばゞじやとはいかでいはれん

○遊女の心ばへ四季の花になぞらへて

戀ぎぬは　　　さくら

此花の心ばへまめやかにして富貴なり花形淋しのゝすさはげしからぬ世にたのもしき色香にて其ほどの

よそにもいそれず誠に花の最上にて美名高し

賤はたは　　藤の花

この花の心ばへはおなごのちに雲の上までも登んと思ふけしきもなし貴賤上下の差別なくちりら有小梢と見るともいまとれれ色とつて遊ぶ風情を見れば油したゝるおもかげ也

松風は　　芍藥

此花の心ざへは只ゆう／＼せんとして美し誠に花れ最上といふかたちながら花王の氣しきいまだ見ねずにゐたのもし

ゐあてせは　　杜若

此花の心ざへそもろ／＼の花に勝れやさしく情け深しかつらのまゆずみ丹花の唇業平の八ッ橋にて心を奪れ給ふもうべに花の所爲なるべし此花の操を書ならべなば一切經ほど書ても盡きまじけれ

花里は　　姫百合

此花と萬づ初心らしく見えてなつこのし花形は兎角差うつむくそものごとに耻のしみ有やらんといとのそゆし

○箱入娘の事　　東京　藤田梅夢

今俗間に深窓中に養ひかしづく娘（一に未通女と云ふ）を箱入娘と云ハ彌生雛祭りのとき婦女子の弄ぶ娘の木偶ハ箱に入あれば夫を云にやと思ひしに竹取物語となんいへる草紙に竹取の翁赫映姫を竹の中より得て美しきこと限りなくいとも稚なければ箱に入置養ふより箱入姫といふよし古き詞ありとなん

○樣と殿のと

圓大暦に人をたふとみて樣といふと四百四五十年をかりもあなたのふみどもより始まりてそり／＼見えたり又た鹿苑院殿樣室町殿樣など殿樣と重ねていへるとも見えたり近來まで。ト。ノ。サ。マと云へりしはあれに因れるあり

○和洋人種の異同表

日本　浣花翁　撰

	日本人種	西洋人種
髪毛	毛色黒　毛丈長　毛様直　毛様細　毛様柔	毛色黄　毛丈短　毛様縮　毛様粗　毛様剛
顔	眉と目の間廣く開く　顋頭の間　稜角少し	眉と目の間狹く迫る　顋頭の間ハ圭角多し
瞳	瞳色黒　寫眞瞳ハ二段に現る	瞳色或ハ黄に或ハ碧　寫眞瞳ハ三段に現る
鼻	小さくして短し両眼の中心より附たり	大にして長し　両眉の下より附たり
二便	二便同時に通ず	大便と小便と別々に通ず
汗	暑き時に汗身より湧出づる	暑き時に汗身より出でず
食	五穀を食す	獸肉を食す
指	指にて物を握るに四本の指にて握る	指にて物を握るに二本の指にて握る
産	産の時後産あり	産の時後産なし
語	語の頭にパピプペポの音なし	語の頭にパピプペポの音あり
禮	卑下謙遜を禮とす	卑下謙遜の道なし
腹腰	腹大にして腰の細き女を貴ぶ	腹細くして腰の大なる女を貴ぶ
情	日本ハ情を貴ぶ	法を貴で情を取らず
忍耐	日本人ハ修行稽古に倦ミ易し	洋人ハ修行稽古に飽かず倦まず

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○各國婚姻の風習（二）

○○普魯士　孛國にては雙方取極の上將に婚姻をなさんとする時は其事狀を新聞紙にて報告するを例とす中等以上は門閥名稱を以て婚姻の基とし之を許すれば嫁娶は人に依らずして族籍に依ると謂ふべきか雙方ともに少しく意に愜はざることあれば立處に離縁せり歐洲中離縁の多きは孛國を以て巨擘とす

○○○臺灣島　此島にては世界無比の習慣ありて女兒を生まば一家眷屬勢を得男子を生ば勢を失ない全家を破滅するに至るの畏れあり故に女兒は大に尊敬を得て男兒は常に賤しまる女兒を生めば一家勢力を得る所以を尋ぬるに此島の俗なる婚姻は女子嫁するに非ずして男子より女子の家に歸ゐて恰も婿養子の如し故に一旦男子歸ぎし後と實家へは少しも關係せざるを以て多く男兒のある家は自然滅亡を免かれず之に反して女兒を產む多ければ其家を益す〳〵榮へて其眷屬は益〳〵繁殖せり然れども野蠻の兆候には朝は情好濃かなるも夕には路人の如きは一般の風俗なり此は是ら婦人の色衰へて愛を失ふに非ずして今日此婦と結婚するかと思へば明日は他の婦と婚し一夕情婦の出來なるときと本妻を棄る事敗履を棄るが如き思をなし更に以て意に留せず又之を制止するの規律もなければ朝合暮離は常のことなり

○洗粉の製法　越後刈羽郡　鯖川瀬夫

○綠豆　五合　○滑石　壹匁　○白苻　壹匁
○白芷　壹匁　○白檀　壹匁　○甘松　壹匁
○龍腦　貳匁

右七種粉なして行水の時肌に塗り洗へば身に光澤を出し肌をこまやかにしあせぼ、にきび、るのきず、さめはだもこまかにやはらぐべし

○赤豆　五合　○滑石　貳匁　○白檀　壹匁

右粉にしてつかふもよし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●石女の答(三)　昔時神功皇后と申さる御方高麗の國を御討ち遊ばさる時仲哀天皇の遺腹の御子臨月にて侍り其時皇后傍らなる小石を取り腰に挾みて祝り給ひけるに妾能く三の韓國を討ち平げ此處に歸りて生れ給へと果して其御言葉の如しとぞ因りて其後ち懷妊せざる女を石女とハ言ひ侍るなり云々(栃木師範校の渡邊へい)

●結髪の答(四)　天武紀十一年(今を距る一千二百年)夏四月詔曰自今以後男女悉結髪、十二月三十日以前結訖之唯結髪之日亦待勅旨云々六月男女始結髪仍着漆沙冠とあり此時より貴賤一統に髪を結る事になれるなるべし

又京都にて處々に女髪結の出來しハ安永五年(今を距る九十四年)頃なり又江戸(今の東京)にては安永七年頃深川茶屋向に上方風の髪結ふ女あり其後天明の末寛政の初め頃より處々に出來賣色女ども結せし事ありしが追々流行て今日はいつくの端々までも破手なる者は結する事となりしと云大凡結髪方の變化は大抵賣色女等の結び初めしものにて他の婦女は皆之に倣ひ唯々男子に寵顧せられんことのみに汲々たり時勢とはいへ嘆かはしき事になん(若宮徵古迂叟)

●同上の答　日本紀天武天皇(人皇四十代)白鳳十一年(今より千百十二年前)夏四月詔曰自今男女悉結髪云々是を我國結髪の初めとなすなり(越後、竹田南枝渡邊へハ、伊賀の里子)

●假名の問(八)我國片假名と誰の作にして平假名は誰の作なるや(信濃、松本くめ女)

●香の物の問(九)茄子蘿蔔等の漬物を香の物と稱する理由如何(静岡、町田翁)

●てにをはの問(十)假名遣てにをはの字義と略答せられよ(秋田、遠藤梅女史)

●言の葉の問(十一)言の葉といふ意義如何(下野、渡邊四郎)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

鬪文

論題 ●日本婦人改良論

●甲點（賞 女學雜誌卅冊分無代價呈上）
●乙點（賞 女學雜誌廿冊分無代價呈上）
●丙點（賞 女學雜誌十冊分無代價呈上）

今回弊堂に於て右鬪文の文題を出し衆評の上甲乙丙點評を付して前記の賞を呈上可仕候間玉文御投寄の諸君ハ何卒國郡町村姓名年齢等詳細御附記の上續々御郵送奉願上候但し來る九月廿五日以後に來着しさる者ハ採錄不仕候間夫迄に相届き候樣被成下度候
以上

投文届所 女學雜誌本局

萬春堂敬告

廣告

福澤諭吉先生立案　中上川彦次郎先生筆記

●**日本婦人論**　平がな付後篇全壹冊　定價金十七錢

定價御送りの上ハ郵税ハ此方の自辨ニて遞送仕候

發賣所　東京日本橋區通三丁目　時事新報社
賣捌所　萬春堂

其外各地の特約新報特別賣捌所にても取次仕候

●**詩文添削**　五七絶壹首金一錢五七律金二錢古詩排律金五錢●漢文白字以下金六錢千字以下金拾錢千字以上金拾六錢假名文ハ半額トス●返稿ハ日本郵税ハ貴辨●謝料ハ郵便切手代用ヲ諾ス尤モ拾錢以下ニ限ルヘシ

●**東京** 麻布區麻布谷町三十八番地 **梅花吟廬**

弊社女學雜誌は前金落掌の上に非されは一切發送不仕候間御注文の節は多少代金御封入可被下候尚又た見本御入用の向は郵税共五錢封入にて御申込可被下

其他御照會の件は郵便往復端書を御用ひ被下度候以上

萬春堂敬白

●日本全國公私立女學校 **女教員姓名錄**

右は弊堂に於て近日編成仕度候に付各府縣の女子師範學校及公私立女學校幼稚園の名稱地名及女教員の姓名等詳細承知仕度就ては乍御手數左の要目丈を至急御報道被下樣相願度此段奉御依賴候也但し出來の上ハ壹部進呈可仕候

萬春堂謹白

各府縣女子師範學校女學校幼稚園御中

○校名（園名）　○位置　何府縣何國何郡何町村何番地
○女教員姓名　何府縣　何の誰　○助教員姓名　同上
○女生徒　現數○○○名

發行所　東京芝區西ノ久保櫻川町八番地　**萬春堂**

持主兼印刷人　大庭宗吉
編輯人　近藤賢三

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町	巖々堂
同神田區雉子町	團々社
同日本橋區新葭町	艮明堂
同日本橋區馬喰町二丁目	自由堂
同京橋區木挽町一丁目	萬字堂
同京橋區銀座二丁目	山口福松
同牛込區白銀町	活神堂
愛知縣名古屋本町二丁目	石版社
岐阜縣美濃國笹土居町	星菱書房